

後藤靜香選集

第七卷

善本社

刊行のことば

一八八四年大分県に生れた著者は、東京高等師範で数学を学び、女子教育に従事すること十三年、使命を感じて退職上京、全国を対象とする社会教育に身を投じ、これに挺身すること五十年、一九六九年八十五歳で東京に没した。

生涯に創刊した月刊誌二一種、その多くは一人で執筆し、その最盛期には購読者百万人をこえ、輪転機で印刷した。著書七〇余冊。

彼は単なる講演者著述家ではなく、常に大衆教育家、文化運動の指導者であった。勤労教育の主張と実践をはじめとし、救ライ、愛盲、老人福祉の先駆者、ローマ字、エスベラント、現代かなづかい等のすぐれた宣伝普及家でもあった。

今その生涯の全著作から、代表的なものをえらび、ここに「後藤静香選集」全十巻を刊行、後世への文化遺産とする。

後藤静香選集 第七巻

波紋・生きる喜び・悩みを越えて

一九七八年七月十日 初版

著者 後藤 静香
発行者 山本三四男

企画編集 後藤静香選集刊行会

代表 中山隆 祐

東京都新宿区高田馬場一―二三―一二

〒160 振替 〇―一二九〇

発行所 株式会社 善本社

東京都千代田区神田神保町一―六〇

〒101 電話 東京 二九四―五三二七

振替 東京 九―一九五五七

印刷 花山印刷

落丁、乱丁はおとりかえいたします

目 次

波 紋

この道をゆく.....	三
感激による飛躍.....	二七
環境からくる感化.....	三〇
指導による向上.....	三六
一切が人間の問題.....	六六
生きる悦び	
私の人生観.....	八二
生活を楽しむ.....	九二
家庭を楽しむ.....	一〇〇

交友を楽しむ……………一〇七

旅行を楽しむ……………一二四

働きを楽しむ……………一二六

教養を楽しむ……………一三六

自然を楽しむ……………一三九

善意を楽しむ……………一四〇

日本の前途を楽しむ……………一六一

結びのことば……………一六三

悩みを越えて

越えねばならぬ幾山河……………一六九

山寺に鹿の音をきく……………一七三

責任をなすりつける悪い癖……………一八六

不幸な運命はこの態度で迎える……………二〇〇

逆境を恩寵と見る思想……………	二五
受けて生かして時を待つ……………	二三
肉体の欠陥を恵みにかえて……………	三八
このような人たちの群もある……………	三〇
ここに幸福へのカギがある……………	三四
私は毎日母の涙を見た……………	三六
未亡人にも明るい前途……………	三〇
母なればこそこの勝利……………	三三
淋しさに徹してこそ人生の妙味……………	三五
恋愛も見合いもこの線で……………	三六
初婚に破れて新しい道へ……………	二四二
晩婚には晩婚の行き方……………	二四八
名誉はその本質に価値がある……………	二四〇
頭を痛める家庭のごたごた……………	二九

働くに職なきなやみ	二六二
災難は分解して検討する	二六七
焼いても焼けぬものがある	二七四
十人十色でこそ成長する	二七八
恐れるな、誤解は時が解決する	二八〇
病院のベッドにいても	二八四
お新さんという人の一生	二八九
生死の問題に対する私の信念	二九六
宗教による救いのさまさま	三〇三
人間は人間の愛で生きる	三〇四
 一言集	
人生は物見遊山にあらず	三〇八
頭も金も生かして使えば殖える	三一

どこにいても雑音はきこえる	三六
使命と悟れば重荷も軽い	三三
大和尚の修行も味噌すりに始まる	三三
今日を完うせよ	三二
ちちやき	
笑って堪えぬけ	三六
まごころは通じる	三三
ヤマ氣をすてよ	三七
もっと広い世界がある	三七
一歩さきに立て	三六
決断を下す前に	三七
道はひらける	三四
あせりは禁物	三七

我をとおすな……………	三八三
足もとを固めよ……………	三八六
自分を信じよ……………	三九〇
「後藤静香選集」第七卷の解説（加藤善徳）……………	三九三

波

紋

序

昭和二十八年四月二十九日、代々木文化会館で心の家関東大会が開かれました。この本はその時の講演です。秋には東京で、おそらく、これが最終であろうという全日本大会が開かれますが、それまでにこの録音を速記にとり、原稿にして一冊の本にまとめたらどうだろう。大会のときにわけたら、みんな悦んで求めましょうし、お土産にしても、意義の多いものだろうという意見があたまをもたげ、気の早い連中が、とんとん拍子に話をまとめてしまいました。話が進んで、私が速記を読んでみますと言葉の足りなさ、重複、また速記のまちがいが目につき、とてもそのまま原稿にする気にはなれません。それで、新しく講演するつもりで、速記をもとにしながら、全部書きかえました。それがこの本です。

読まれるときには、小見出しぬきに、なるべくゆっくり音読して、大きい句切りのところにいったらあともしりし、ずっと小見出しに目を通して下さい。そうすれば、系統だった主張がお心にのこりましょう。

昭和二十八年七月

後 藤 静 香

この道を行く

心の家は独特の団体

皆さま、ようこそお出で下さいました。本日の大会が、この盛会をみましたことをごいっしょに喜びましょう。

皆さまは、ご多用のなかを、とくにおくり合せになって、お集まりになるほど、ご熱心な方々であります。中には、私と長い長いご縁の方もたくさんいられます。心の家のことは、何もかも十分お分かりになっていられるはずであります。しかし、全然ご承知ない方から、心の家とは何かときかれたとき、どうお答えになりますか。ご自分には分かりきっているようで、さて説明しようとすると、どう話していいのかお迷いになる方が多いかも知れません。

「この頃、似たような名前のものがありますね」という人もあります。名前には似たところがあっても、内容はまるつきりちがいます。心の家は、新興宗教でもなければ、単なる修養団体でもありません。心の家は、他に類のない独特のものであります。説明の便宜上、この運動がもつ最も顕著な特色をとりあげて、三つの面から観察してみましょう。

その第一は、人を動かすということです。第二は、人をつくること、そうして第三は、人を結

ぶことであります。これだけ申しますと、皆さまは、「そうだ、ああそうだった」と、ご自分の思っていたことを、言い当てられたような気がされましょう。

心の家は人を動かす運動

一寸の虫にも五分のたましいがあると言われています。人間には、一人一人に自分の心があります。自分自分の心をもった人間を、そう簡単に動かすことはできません。人間という動物は、なまやさしいことで、動かされるものではありません。しかし、動かすことが必要です。動いてもらわねばどうにもなりません。

三越本店の玄関先においてあるライオンは、立派な姿をしています。しかし動きません。坐ったきりです。これでは、飾り物というだけで、用心棒の代りにもなりません。眠れる獅子は走る犬にしかずという言葉があります。「おれは偉いんだ」というだけで居眠りしている獅子よりも、走り使いか、寝ずの番ならできるといふ犬の方が役に立ちます。

祖国が、日本が、こんなみじめなありさまになっているとき、寝ながら、平然とながめて、とかくの批評だけしている人間が、いくらいたからとて何になりましょう。居眠りをやめて立ち上ることです。みこしをあげて自分の持場につくことです。祖国という重い荷物を、めいめいの肩にのせ、同じ方向に歩いてこそ国も救われ、おたがいも救われます。

わたくしどもが、どうもがいてみても、一人一人の力は、たかの知れたものです。ともに力をあわせ

てこそ仕事ができます。どんな英雄偉人でも、自分一人ではなにもできません。人を動かし、打って一団とし、大きい力として動かすところに、英雄たり、偉人たる理由があります。人間は権力で動きません。人間は金力でも動きません。ちょっと見ると、権勢や黄金で自由に動かされているように見えることもありますが、ほんの一時のことか、うわべの動きにすぎません。人間は人間の愛に感じ、まごころだけで動きます。愛のない政策、まごころのない優待、それで人間の心を左右することはできません。心の家には権力もなく金力ありません。権勢や黄金の前に膝を屈して、その力を利用しようともいたしません。心の家にあるものは、人を愛する心です。そのまごころ一つです。これが一切であり、これが唯一の武器、唯一の財産であります。今日まで、これ一つで人を動かしてまいりました。驚くほどよく動いてくれました。現にこの会場を見ましても、東京都下をはじめとし関東各県、さらに静岡県、新潟県からお出でになっています。

そこに三宅島の測候所長がいられます。海を渡って来られたのです。ありがたいことです。この会場だけではありません。毎月の『新建設』によって日本中の同志が、さらにその人びとを通して幾倍の人たちが、起って一定の方向に動いてくれます。うれしいことです。

人間は人間のまごころで動く申しましたが、まごころでさえ接すれば、誰でも彼でもすぐに動くものとはきまっています。いちばん早く動くのは、何といっても、血の赤い若人です。人のまごころを率直にうけ入れる純情の持ち主です。世の波風でもみくちやにされ、ひがんだり、ひねくれたりしたような人や、頭のかたくなった、伸びのとまった人は、どんなに美しい話でも、一応うたがってかかりま

す。一度や二度では受け入れられないのが普通ですが、無理もないことです。しかし誠意をもって接していると、たいていは分かってもらえます。相当の年配になっても、講演をきくとか本を読むとかして、真心を率直に受け入れる人があります。そういう人たちは、心に若さをもち、第一線で仕事をしている人、たえず成長している人のようであります。

心の家の運動は、人を動かす点において、とくにすぐれたもので、主張することが、着々実績をあげるといことが、心ある人びとを驚かせております。

心の家は人をつくる運動

この運動のもつ第二の特色は、人をつくることであります。これにはくわしい説明をするよりも、生きた証人をご紹介した方が、わかりが早いかも知れません。この会場を見わたしますと、青年時代からというよりも、むしろ少年の時から、この運動を知り、この思想を消化し、この空気の中で自分を育てあげた方が幾人もいられます。先ほど、立って感想をのべられた日本点字図書館理事加藤善徳さんなども、子供のときから私の書いたものに親しみ、十八歳のとき初めて講演をきき、今にいたるまで一貫してこの思想の中に伸びて来られた方であります。いちいち名前はあげませんが、この運動の中から、世界的の学者も出ました、芸術家も出ました。世間的にも相当に認められている実業家も出ました。学生時代私のもとで修養し、この運動に参加した青年の一人は、大臣となってよい仕事をしていられます。その、いちばん前の席に、最高裁判所事務総局の磯崎判事がかけていられます。昨年のオリンピック

大会に、日本代表の一人として参加し、すばらしい記録をつくった飯室芳男選手もいまこの会場で、この話をきいていられます。

人をつくるといっても、ネンド細工とはちがいます。思いのままにつくれるものではありません。本人にその素質がなければできません。素質はあっても、本人がその気にならねば、どうすることもできません。それだから「つくる」というよりも、この運動から「生れる」といった方がたしかもしれません。一人一人のもっている素質を伸ばす運動、長所を引き出す運動といったら、もっと適切でしょう。四十年という歳月は、短いようでも長い。この間に、現在日本のだいたんな役割をしている人びとが都会にも田舎にもたくさん出ました。おどろくべき事実であります。このことは、過去にとどまらず、現在も同様で、りっぱな人物、有為な人物が、続々とつくりられています。

心の家は人を結ぶ運動

人と人とを結ぶ、この点において、この運動ほど徹底しているものはなからうといわれます。支部の集まりは知ったもの同士でありますが、九州大会とか、関東大会とかいうような広範囲の集まりを開いた場合、おたがいに顔も知らず名も知らず、全然初対面の人が大部分です。それなのに、同じ心の家の会員であるというだけで、最初から胸を開いてかかります、何のへだても感じません。そこには、よそよそしい他人気というものが見られません。どうしてこうなるのか、ふしぎでたまらぬと申します。全日本大会というような場合は文字通り全日本各地から集まった人びとで、男もあれば女もある、年より

もあれば若い人もある、学問のある人、小学校きりの人、地位の高い人、名もないような人、実に種々雑多です。それなのに、これほど多種多様な人たちが、身分も肩書も年齢も学歴も、みんな忘れたようにして同じ食卓につき、枕をならべてねむり、ともに講演をきき、たがいに感想をのべあつて、何かしら、言葉で現わせないような空気の中にとけあっています。一度この味を占めると忘れることができません。多額の旅費をつかい、いそがしい暇をつぶして大会に集まるのも、この空気にひたりたいからであります。血を分けた兄弟姉妹のようだとはい、誰もの実感であります。それが、単に一時的な気分本位のものでなく、一身上の重大問題に直面したような場合でも、いちばんたよりになるのは心の家の同志で、時には親類縁者にもまさると申します。このことは、こうありたいという理想でなく、到るところに見られる事実で、多年の同志ならば誰でも経験ずみのことであります。どうしてこうなるかという説明を、簡単な言葉で現わすことは困難と思いますが、毎月私の書いたものを読む乳兄弟のような関係であることが、おもな原因かも知れません。

国際語であり、世界の中立語であるエスペラントで、精神的な家族ということを、アニーマ・ファミリオ (anima familio) と申します。その頭文字をとった A・F を心の家の旗に入れ、メダルにもこの言葉を、原語のまま使っております。以上述べましたことを要約しますと、心の家を、次のような言葉で言いあらわすことができます——

「心の家は、人間の問題に重点を置いて、精神的教化の網をはり、物心両面から、平和日本を建設して人類の幸福を増進しようとする運動である」